2019年11月24日　中野教会「聖書の学び」

**「中間期：ユダヤ教の教派」**

中間期の学びの最後として、中間期に育ったユダヤ教の教派について学ぶことにしたい、と思います。新約聖書のなかで批判の的とされているパリサイ派もこの中間期に生まれ、育ちました。新約聖書には、パリサイ派以外には「サドカイ派」というのも出てきます。マタイ3:7ではバプテスマのヨハネが「しかし、パリサイ人やサドカイ人が大ぜいバプテスマを受けに来るのを見たとき、ヨハネは彼らに言った。「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。」と言い放っています。主イエスもマタイ16:6で「パリサイ人やサドカイ人たちのパン種には注意して気をつけなさい。」と言い、両派の人々に警戒せよ、とおっしゃっています。この2つ以外では明確な表現はありませんが、間接的に表現されている箇所があります。主イエスの弟子で「熱心党のシモン」という人物が登場します。熱心党というのはガリラヤで勢力を持った民族主義者集団です。教理的にはパリサイ派です。このうち、急進グループで「暗殺」をも辞さない、という「シカリ派」というのもあります。ここまでくるとむしろ政治集団です。信仰集団でいえばバプテスマのヨハネとその弟子もユダヤ教の教派と言えなくもありません。

新約聖書以外の古代の文献の中に、これ以外の教派がいくつか出てきます。1世紀後半のユダヤ人歴史家でヨセフスという人物がいます。彼は著書の中で「パリサイ派」「サドカイ派」に加え「エッセネ派」という教派をあげ、ユダヤの三哲学と言っています。このエッセネ派の急進派とみられる「クムラン教団」があります。これは有名な「死海写本」を残した教団です。エッセネ派とほぼ同じ教理の集団のようですが、この世から出て死海のほとりのクムランで隠遁生活をしたことに特徴があります。更にエジプトのアレキサンドリアの近郊に住んだ隠遁集団であるテラペウタイという派もあります。AD1cのアレキサンドリアのユダヤ人哲学者フィロンが『観想的生活』で述べている宗派です。これらの宗派について概略のお話をしたのち、特にパリサイ派とエッセネ派について追加的にご説明することにしたい、と思います。

まずパリサイ派とサドカイ派です。新約聖書でおなじみの派です。この二つの派の由来を知るには中間期のユダヤの歴史を知る必要があります。ユダヤ民族の内、ユダ王国が新バビロニアに滅ぼされたBC587年の前後にバビロン捕囚といいユダ王国の上流階級の人々は、バビロンに連れていかれます。そののち、新バビロニアはペルシャに滅ぼされ、バビロンもペルシャの支配下になります。ペルシャは宗教的寛容策をとり、捕囚のユダヤ人に故郷へ帰ることを許します。そして、エルサレムに帰り神殿の再建設を行いつつイスラエル信仰の復活を図ったのがエズラ、ネヘミヤです。信仰的な指導者がエズラ、政治的指導者がネヘミヤでした。この時成立したのがユダヤ教です。精神的リーダーはエズラであり、律法学者の創始者的存在です。エルサレム神殿が再建されたのがBC438年ですから帰還から約100年を経ています。その後ギリシャが勢力を拡大してきて、マケドニアのアレキサンダー大王が大遠征をおこないインドの方まで勢力圏にいれました。しかし、アレキサンダー大王はBC323年、若くして亡くなり、その後はいくつかの勢力が分立する状態になりました。イスラエルの地はプトレマイオス朝エジプトの支配下に入ります。エジプトはその支配地域に対し宗教の自由を認め、イスラエルの地も自由な雰囲気のなかでいろいろな文化が花咲いていきます。いわゆるエジプト時代です。ヨブ記、雅歌、伝道の書のような、伝統的なユダヤ教の教えにはそぐわないような文書のいくつかが成立したのもこの時期です。

しかし、背後ではエジプトとシリアの勢力争いが続いており、漸次セレウコス朝シリアが優勢となりました。そしてBC198年シリアのアンティオコスIII世大王がエジプトを破り、イスラエルの地もシリアの支配下に入りました。シリア時代です。この大王の子のアンティオコスIV世エピファネスが王となったとき、イスラエルのヘレニズム化を一気に進めようと図ります。ユダヤの中にもヘレニズム化に積極的なグループもありました。このエピファネスが神殿礼拝を禁止した時、エズラ、ネヘミヤ以来の律法を守ることに執着するグループが反乱を起こします。地方の祭司が中心です。彼らをハシディーム、敬虔主義者といいます。敬虔な信仰心を尊ぶ、という意味です。シリアが王の後継者争いで内紛が絶えなかったこともあり、この反乱が成功します。BC164年のことです。ユダ王国が滅亡してから約420年後となります。この反乱はマタティアという地方の祭司が始めましたが、その子ユダがリーダーとなって、反乱を成功に導きました。この一族はハスモン家ということから、この後の王朝をハスモン王朝と言います。

ハスモン王朝も最初の内は、信仰的純粋さを持っていましたが、権力の地位に立つとその地位を保つために、信仰をおろそかにするようなところが見られるようになります。かつては敵対していたヘレニズム派と妥協していきます。地方の祭司を中心とするかつてのハシディーム達はこのような状況を不満とし、ハスモン王朝に敵対的姿勢をとるようになります。エズラ、ネヘミヤ以来の律法とその解釈的伝統を守り抜くことを主張して、グループを形成していきます。特に、ハスモン家のヨナタンがユダ王国の王と大祭司を兼ねたことがこの流れを決定的にしました。ハシディームの人々からすれば、王と大祭司を兼ねるのは許されない、ということと、大祭司はモーセの兄アロンの系統のツァドク家がこれを継いでいくのが当たり前なのに、これと無関係のハスモン家の人間が大祭司職となることは許されない、という主張をしました。この時のハスモン王朝、すなわち権力側がサドカイ派と言われ、ハシディームの伝統を守ることを主張したのがパリサイ派です。ツァドクのヘブル語の「義なる者（tsadqi:m）」に由来しているとか「ツァドク」に由来している、という説がありますが定かではありません。パリサイはヘブル語の「分離する（hifri:d）」に由来している言葉だと言われていますが、何からの分離なのかも含め定かなことはわかりません。

サドカイ派はハスモン王朝の貴族と大祭司を含むエルサレム神殿の祭司たちです。ユダヤ社会の上流階級に属する人々です。この貴族階級の人々の源流は、マッカビーの反乱以前のヘレニズム派です。更に、そのヘレニズム派の源流をたどれば、エジプト時代のトビア家です。トビア家はイスラエルの北に基盤を置いた商人で、外国貿易によって財を蓄え、エジプトから徴税権を得て、イスラエルへの支配力を高めていきました。その時、トビア家に対立したのがオニアス家と言い、エルサレム神殿の大祭司の家系の人々です。この人々はエズラ、ネヘミヤ以来のユダヤ教の伝統を守ることを主張しましましたが、その後、エルサレム神殿祭司はヘレニズム派と妥協し、権力の一端を担うようになっていきます。サンヘドリンと言われたユダヤ議会の構成は、ヘレニズム派とエルサレム神殿の祭司たちでした。このエルサレム神殿の祭司たちが狭義のサドカイ派で、モーセ五書のみを聖書と認め、そこに示されている律法を守るべき、とする人々です。ヘレニズム派の経済的上流階級もユダヤ教を捨てることを主張しているわけではなく、ユダヤ教の祭儀を守ることは当然のこととしていましたから、エルサレム神殿祭司との妥協が成立したのです。教理的には大祭司を中心とするエルサレム神殿祭司たちの祭儀中心の律法順守でした。これがサドカイ派の理論です。ラビたちの律法解釈を含む律法を順守するのではありません。信仰的中身は希薄で、国家的行事としての神殿祭儀を守ることに重点がありました。

これに対し、本来のオニアス家の流れをくむ人たちがいました。エルサレム神殿の祭司のような特権階級ではない地方の祭司たちです。彼らがマッカビー反乱を担いました。ハスモン王朝のそもそもはこの人々です。しかし、ハスモン王朝が具体的権力を担うようになるとヘレニズム派やエルサレム神殿祭司たちと妥協するようになり、サドカイ派の中に組み込まれていきます。ヘレニズム化という文化的な大潮流のなかで、旧来のユダヤ教信仰を墨守することができなくなったのです。いわゆる「現実的」対応です。世界の歴史の中で似たようなことは多数見られます。「それは間違いだ。エズラ、ネヘミヤ以来のユダヤ教の伝統を守るべきだ」という人々がパリサイ派を形成したのです。もちろん、地方の祭司グループが中心的担い手ですが、これを支持したのは、財閥的なヘレニズム派ではない、中小農商工業者たちです。まだ若干残っていた中小農業者、牧畜者も含んでいました。しかし中心は農機具製造の工業者、家の建築を担う大工、運送業を兼ねている中小商業者などです。要するに、当時の中産階級です。ガリラヤがハスモン王朝の支配下に入ったのちは漁師たちもこの中産階級に入れられます。当時、漁師は比較的豊かな人々であったのです。これら階層から、律法教師と言われるラビが輩出され、ハスモン王朝の支配権の拡大に沿って、宣教を行い、その勢力を拡大していきました。ハスモン王朝は軍事的に拡大路線をとり、ユダヤの南のイドマヤ、ユダヤの北のサマリヤ、ユダヤの東ペレア、更にはサマリアの北のガリラヤにも支配権を拡大して行き、アレキサンドロス・ヤンナイオスが王であり大祭司であったBC2cには支配地域は、かつてのソロモン王国の版図を超えるまでになりました。そのそれぞれの地域にラビが派遣されユダヤ教の布教が行われたのです。それを担ったのがパリサイ派です。しかし、サマリヤは従来からモーセ五書を聖書とするヤハウェ信仰あり、パリサイ派の宣教は成功しませんでした。ちなみに、サマリヤ教団は小さな集団ではありますが、今も、かつてのサマリヤの町の近くにいるそうです。

当時のユダヤ支配層のサドカイ派の方もパリサイ派の実力を無視はできず、エルサレム以外ではパリサイ派の活動を認めざるを得ませんでした。アレキサンドロス・ヤンナイオスも王になる前はパリサイ派に好意的であった、と言われています。しかし、王兼大祭司に就任してからは、一転してパリサイ派の大弾圧を行います。パリサイ派の勢力が宗教的次元にとどまらず政治的領域にまでその力が及ぶことを危惧した結果であろう、と考えられます。5万人のパリサイ派を虐殺したと言われています。しかし、信仰面でのパリサイ派の敬虔さを評価する人々はハスモン王朝の内部にも多数おりました。ヤンナイオスのあと彼の妻アレクサンドラが王位を継ぎます。イスラエルの歴史の中で唯一の女帝です。彼女は大祭司を兼ねるわけにはいきませんので子のヒルカノスII世を大祭司としました。このアレクサンドラはパリサイ派を重用し、この時期パリサイ派は政治的権力も担うことになります。しかし、それは長続きせず、アレクサンドラのもう一人の子アリストブロスII世が王兼大祭司となったときには再びパリサイ派を弾圧し始めます。これ以降、パリサイ派は権力を掌握するような立場にはなりませんが、パリサイ派の宗教的影響力はサドカイ派も無視することはできず、サンヘドリンにおいても議席を持つようになります。中央政治・宗教はサドカイ派、地方宗教と信仰生活はパリサイ派と言ったところでしょうか。パリサイ派は文字通りの律法を順守することもさることながら、その解釈で後にミシュナーと呼ばれるようになる伝承・伝統も守り、これを実生活に適用することを求めました。そのため安息日に関する聖書解釈を細かくし、それを守ることが律法順守である、としたのです。サドカイ派は祭儀を守ることだけで実生活において律法の適用を求めることはしませんでした。教理的な違いもさることながら、この実生活への律法適用という点が両者の決定的相違です。

但し、わすれてならないことがあります。ハスモン王朝の以前から進行していたことですが、農地所有者の不在地主化です。中小規模農業者は没落し小作人化し、その農地の所有者は農地管理を別の人間にまかせ、不在地主となり、近郊の都市部に住む、ということになっていったのです。もう、十二部族への嗣業地などということは無意味化していました。この小作人たちはイスラエル社会の下層階級を形成いたします。それから牧畜で生活を支えていた人々は、小規模のままで、やはり、このイスラエル社会の下層階級の一部となっていきます。一定の土地にとどまっているわけではありませんから大規模化はしませんでした。かなりの規模の牧畜経営を行うようになった人々は中間階級の仲間とみなされていたはずです。いずれにしろ、小作人を中心とする下層階級はイスラエル社会の人口としては最大でも、政治・宗教の世界では価値ある人々とは認められていませんでした。パリサイ派も宣教対象には入れていませんでした。聞き伝えのイスラエル信仰を守ろうとしていましたが、地場信仰である豊穣神信仰と妥協しつつ生活していた人々です。サドカイ派とパリサイ派の対立など無関係という人々です。

更には、戦争未亡人、離縁された女性で売春しか生きるすべのない者、なにかの事情から小作人としての立場も失い、乞食の生活をしなければならなかった人、身体障害者として世の中に役立たない者として烙印を押されたもの、ユダヤ教の教理で「けがれた者」とされたツァラアートにかかった人など、一言でいえば「その他の人々」の集団もありました。今でいえばホームレスや難民です。このような人々もユダヤ教の教派など関係ありません。地場信仰も守っているわけでもありません。生活を支えていくことさえ難しい人々です。主イエスの言葉を聞いていた民衆とはこの「その他の人々」です。おそらく主イエスの言葉を聞いて理解できた人は皆無だったと思われます。奇跡を起こすイエスだけが彼らの頼りであった、ということです。重要なことは小作人を中心とする下層階級、浮浪者的な「その他の人々」は宗教としてのユダヤ教においては無意味な存在であり、もちろん宣教の対象ではなかった、ということです。主イエスのメッセージはユダヤ教信仰とは全く異なる人々に語り掛けられていたということです。せいぜい、パリサイ派の一部に主イエスのメッセージは軽んずべきではない、と考えた人々が居た、というにとどまります。

パリサイ派の集団の中から、更に敬虔主義を強調し、ユダヤ教的な意味で「清い」生活を強調する勢力が発生します。エッセネ派と呼ばれる信仰集団です。律法における食物規定を厳格に守り、汚れを避ける生活を実践する人々です。ハスモン王朝の基盤が確立したヨハネ・ヒルカノスI世の時代と推測されています。このような神の前での清さを強調し、それを汚した人間は救われない、という信仰的態度は常にあります。きわめて真面目な信仰集団ではあるのですが、他者に対し排斥的となり、特殊集団を形成するようになります。ユダヤ人歴史家ヨセフスはこの教派に非常に興味を持っていたようで、その教理内容を『ユダヤ戦記』のなかで詳しく書いています。社会層としては、パリサイ派の支持層である、中小農商工業者、中産階級です。

この集団のなかから、「清い」生活を徹底しようとすると、結局この世との交流を断つ覚悟をしなければならない、という集団が生まれます。そして修道院的な隠遁生活を行うグループが出てきます。死海の西海岸のクムランの洞窟で隠遁生活を行い、聖書の研究と祈りにいそしむクムラン教団というグループが現れました。この集団は1947年に洞窟の中から発見されたいわゆる「死海写本」によってその全貌が明らかになってきた信仰集団です。このおかげでクムラン教団の信仰内容は明らかになってきたのですが、その母体と考えられるエッセネ派の信仰内容は詳細定かではありません。クムラン教団自身もエッセネ派から出たのではなく、サドカイ派の流れなのではないか、とか、パリサイ派の分派なのではないか、という意見もあります。ここではエッセネ派の分派という通説に従っておきます。時期的にはエッセネ派が成立した少し後のBC140年ころと考えられます。ハスモン王朝でいえば初めて王兼大祭司となったシモンの頃です。

新約聖書にはバプテスマのヨハネという宣教者が出てきます。彼は、どのような教派から出てきたのでしょう。一番一般的なのはエッセネ派から分裂し、弟子をもって「悔い改め」の宣教をした人物である、という見方です。主イエスはバプテスマのヨハネから洗礼を受けますので、主イエス自身がエッセネ派の一員であった時期があるのではないか、という説が“ちまた”に流れた時期がありますが現在は否定されています。この世や庶民の生活に関する見方がエッセネ派と主イエスでは違いすぎます。バプテスマのヨハネのやったことはBC9cのエリヤとその弟子エリシャのやったことと似ています。権力に対し忌憚のない批判を行う点はエレミヤやハバクク等の社会に警笛をならす預言者の伝統に沿っているように見えます。しかも徒党を組んで勢力を拡大する、というようなことには全く無関心です。サドカイ派、パリサイ派、エッセネ派のようなユダヤの教派には収まらない人物と言えます。あえて教理的な近さから言えば、やはりエッセネ派であろうと思います。ちなみにシリアの一部に今でも「バプテスマのヨハネ」の弟子と称している信仰者集団がある、そうです。

パリサイ派の急進派として熱心党という党派があります。これは教派というより政治的グループで、今でいえば政党といえるでしょう。ガリラヤの中産階級が支持母体です。彼らは異教徒による支配をイスラエル信仰者の屈辱と考え、イスラエル共同体の完全独立を主張しました。そもそもユダ王国はシリアとエジプトという2大帝国の谷間にあって、両者のいずれかに接近して生き延びてきた土地柄です。両大国の勢力が衰えた短期間に独立を確保できていたにすぎません。ローマがエジプトを制圧してからはローマの従属国として命脈を保ちました。この熱心党はギリシャ語でゼ―ロタイと言いますが、そもそもはアラム語の「熱心」という言葉に由来しており、その意味は「ヤハウェに熱心」ということです。ハスモン王国がローマの属国になったBC49年以降はローマに対する完全独立運動の中心グループとなりました。完全独立とはローマによって課されている税金の支払い拒絶と軍隊・軍事基地の撤収です。BC47年頃と推測されている「ヒゼキヤの反乱」、ヘロデ大王が死んだBC4年頃と推測される「ヒゼキヤの子ユダの反乱」、AD6年頃と推測される「ガリラヤのユダの反乱」更にはAD44年頃と考えられる「モーセ・チウダの反乱」そしてAD66-70年の民族の命運について決定的な「第一次ユダヤ戦争」という一連のユダヤ人の反乱の中心勢力はこの熱心党です。ガリラヤのユダの反乱の時に熱心党という名乗りを上げたようです。主イエスの弟子に熱心党のシモンという人物がいますが、熱心党を抜けて、主イエスの弟子となった人物と推測されます。イスカリオテのユダについても一時期この熱心党のメンバーであったのではないか、という説もあります。彼らは地上的メシアの期待を主イエスに掛け、弟子となったが、それに失望し、主イエスを裏切ることになったのではないか、というのです。あり得ないことではありません。

さらにひとつエッセネ派の分派ではないか、という説が唱えられているテラペウタイという信仰グループがあります。このグループはAD1c前半のアレキサンドリアのユダヤ人哲学者フィロンが『観想的生活』のなかで語っている信仰共同体です。アレキサンドリア近郊の丘の上で修道院的生活をしていた集団です。私有財産を持たず、禁欲的生活を送っていました。この点からクムラン教団と類似したところがあり、エッセネ派の一部がエジプトに移り、形成した宗教者団体ではないのか、といわれるようになったのです。しかし、その「観想的生活」は上流階級の人々の生活態度をうかがわせるので、エッセネ派とは異なる、と言う見方も有力です。テラペウタイというのはギリシャ語で「仕える、奉仕する、看病する、癒す」という言葉からきたことばです。「セラピー」のもともとの言葉です。クムラン教団をサドカイ派の分派という説があるように上流階級の人が信仰生活に入り、このような集団に参加したのかもしれません。日本流にいえば「皇室の出家」です。エジプトはその後、修道院の先駆けともいえる隠遁集団が多く現れますが、テラペウタイもそのユダヤ教的先駆け、ということなのかもしれません。また、アレキサンドリアのユダヤ人共同体の一部がこの集団を形成したのかもしれません。そうだとすれば、教理的にはパリサイ派ということになります。その他、仏教の影響を受けた集団ではないか、という説まであります。当時エジプトには仏教の宣教団が入っていたことが記録にあるからです。キリスト教の流れではないかという説もないわけではありませんがフィロンの活躍時期との関連で無理な説です。このテラペウタイはエジプトにおけるキリスト教であるコプト教に影響をあたえたのではないか、というようなことも言われていますが全くわかりません。

以上、ユダヤ教の教派といわれ今までに判明しているグループについて述べました。次はこの主流的な教派であるパリサイ派についてその教理をもう少し詳しく見ていきます。まず、復活の点です。マタイ22:23で「復活はないと言っているサドカイ人」と言い、パリサイ派と対比的に言っています。ここでいう「復活」は当然肉体を伴った形での「死よりの復活」です。この意味での復活が明示的に語られているのはダニエル書12章とか、初期ハスモン王朝の歴史を叙述しているマカバイ書です。モーセ五書のみを聖書とするサドカイ派はこの意味での「復活」を信じるはずはありません。イスラエル信仰の初期は、“個人はイスラエル民族の一員としてのみ永遠に生きるのであって、共同体の存続に個人の命はかかっている”という考え方です。イスラエル信仰共同体が分裂し個々人がその共同体の永遠性に掛けることができなくなったところから、「復活」信仰が育っていきます。そして黙示文学の伝統の中で「復活」が希望の現実化としての意味をもつようになったのです。パリサイ派はその希望を教理の中に取り入れました。

これと若干関連を持ちますが「神の使者」とか「天使」と呼ばれる、人間と神の中間に位置するような存在を認めるかどうか、という問題があります。サドカイ派も「神の使者」の存在は認めますがあくまでも特別な人間として認めるのであって、一種天的存在としてのそれを認める訳ではありません。これらの天的存在は、黙示文学のなかで育ってきた教えであり、偽書と言われている第一エノク書が有名です。この文書の中に天使が多数あげられています。パリサイ派はこの黙示文学に叙述された「天の御使い」を体系化していきます。そしてAD70年のエルサレム神殿崩壊後の後期ユダヤ教で天使の階級付けが完成します。このことは「救い主」理解の差と関連しています。サドカイ派は古来の王や預言者のようにユダヤ民族の指導者として民族を解放してくれる「人間」を期待していますが、パリサイ派は普通の人間ではなく、神の使者である御使いの頭（かしら）がメシアとして登場しイスラエル信仰共同体を復活する、という希望となります。

この「復活」と「メシア」の教理を見ている限りではキリスト教信仰と通じるところが感じられます。キリスト教はユダヤにおけるパリサイ派の信仰を継承している、という側面もある、ということです。しかし、律法に関しては明らかに異なっています。

律法に関するサドカイ派とパリサイ派の差は律法の解釈的伝統に対する姿勢に大きな差があります。サドカイ派は国家祭儀としての宗教に最大の関心があり、生活実践の中での律法順守にはたいした関心を払いません。モーセ五書のみを聖書と認める、というサドカイ派の一面を表しています。パリサイ派の律法順守の典型は安息日順守に現れています。安息日順守は十戒の中で決められており、これに対する違反は死を持って償われなければならないとする大変厳しい戒律です。そのため、この解釈も精緻を極めていくことになります。本来は、“労働を休み、神と賛美する礼拝の時を守りなさい”というに過ぎない、ものに、安息日に歩いてよい距離はどれだけか、とか、体を動かすのは、どんな目的の場合のみ許されるのか、とか、家畜や人間の命を救うようなこともダメなのかとか等、各種解釈が広がっていきます。そして39項目にわたる安息日禁止事項集が出来上がっていきます。

この律法解釈、なかでも安息日解釈をめぐってBC60年頃にヒレル派とシャンマイ派ができます。両方とも指導的なラビの名前から来たグループです。この教派は学派と言ってもよいもので、政治的意味を持ったものではありません。シャンマイ派が文字通りの律法順守を主張し、ヒレル派は解釈に幅をもたせるリベラル派ということができます。例えば、ヒレル派においては、人や動物の命に係るような行為、医療行為は安息日にも許される、というようなものです。漸次、ヒレル派が優勢になっていきます。主イエスの言葉にはヒレル派が言っていることを前提にしているように見えることは事実です。主イエスの説かれたメッセージの内容はパリサリ派・ヒレル派の言っていることと共通しており、主イエスの宣教は一種のヒレル派による宣教である、とまで言う人さえいます。教理の次元で見ればそのように見えるところもありますが、信仰の次元でみると全く基本を異にしておりこのような見方には、賛同できません。このヒレル派のラビの指導者が「使徒の働き」に登場するガマリエルです。ガマリエルはユダヤ教パリサイ派のラビとして主イエスの生まれた頃に活躍し始めた人物で、使徒パウロの師です。サンヘドリンの議員でもありました。もっともガマリエルを師と言っているのはパウロ自身ですから、ガマリエルが主宰した学校をパウロは卒業した、ということだけかもしれません。パウロの回心以前の行動はヒレル派というより、むしろ、シャンマイ派的です。

その後の歴史を経て、ユダヤ教はこのパリサイ派ヒレル派の流れに収斂し、現在に至っています。

もう一つエッセネ派の信仰内容を見ます。ヨセフスの『ユダヤ戦記』に書かれていることを項目表にしたものがありましたので、それをご覧ください。禁欲主義的で、財産は共有で集団生活をします。結婚については子孫を残すという目的においてのみ認める、ということで独身者も多数いたと思われます。衣服はボロボロで物質的に豊かなことを軽蔑しています。常に白い衣をまとっています。労働は神の命として行うがそれによって財を蓄えるということはありません。「エッセネびとは、他のことでも監督者たちの命令なしには何もしないが、「人を助けること」と「憐れみを施す」 ことだけは、自分の裁量でできる。」と言われており慈悲の集団であるように言われています。武器は原則持ちませんが、出かける時、盗賊が出たとき自衛する程度の武器の帯同は認めていたようです。「エッセネびとは、怒りの控えめな表明者、憤怒の抑制者、忠誠の標榜者、平和の仕え人である。」と言われています。

入団の条件は厳しく3年の訓練が求められています。12の誓いを告白し入団が認められます。一言でいえば「神の義」に従った生活をする、ということです。重大な罪を犯すと追放されます。追放されると、教団の中にいたときのような助け合いはありませんので、結局野垂れ死にすることになります。律法は解釈的伝承も含め完全順守です。安息日には用を足すため出て行くこともしない、と言われています。つるはしで穴を掘り、そこで用を足して、また土で埋める、と言っています。異邦人とは完全遮断。ローマとの戦争ではいかなる拷問にも屈せず、拷問者に皮肉を言いつつ、嬉々として死んでいった、と言われています。

霊魂不滅を信じており、肉体は朽ちても霊魂は不死でこの世にとどまる、と信じていたようです。これは霊肉二元論であり、パリサイ派の伝統的理解とは異なっているように見えます。むしろ黙示文学に示された、霊的世界に生きる態度のように見受けられます。霊肉二元論はエジプトやメソポタミアの伝統です。教理的にはパリサイ派の直系を任ずるパウロは「霊の体」ということを言うことにより復活の体を示し、霊肉一元論であるイスラエル信仰との一貫性を説明しています。エッセネ派はこれとは違い、肉体は罪の宿るところ、という考え方を示しています。また黙示文学のように、将来をあらかじめ語るという意味での予言もしますが、ヨセフスはその予言が外れることは滅多にない、と言っています。

また、死海写本にあるクムラン教団の規定集「宗教要覧」「会衆規定」を見ると確かにエッセネ派の特徴と類似している点が大変多いようです。しかし、ヨセフスがエッセネ派の特徴として挙げていない点も見られます。死海写本「ダニエル書註解」にでてくる「義の教師」の考え方はヨセフスのエッセネ派叙述には全くありません。この「義の教師」と主イエスを同定し、キリスト教はクムラン教団から出てきたものだ、などという話がまことしやかに語られたこともありました。よく見て、考えれば、クムラン教団と主イエスは、全く関連はないと思います。他方で、主イエスがどこで、聖書について学ばれたのか、またあのような「貧しき人々」に対する愛のメッセージを説く契機となったのは何だったのか、については不可思議の世界の中にあります。AD1cにおけるユダヤ教の教派の状況を理解することなしで、新約聖書を理解することは不可能と言ってもよいと思います。また、福音書が書かれたのは第一次ユダヤ戦争の後で、パリサイ派以外のユダヤ教の教派は壊滅してしまった時でもあり、サドカイ派やエッセネ派のことも一緒くたにパリサイ派としてしまっていることも注意を要します。主イエスの福音宣教の時代にはこれらユダヤ教の教派も存在したということも忘れてはなりません。したがって、主イエスのメッセージは具体にはどのような人々を意識して語られているのかを考える時、これら教派の状況を再構成して考える必要があります。一言、祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日は中間期におけるユダヤ教の教派について学びました。新約聖書、なかんずく主イエスのメッセージを理解する上での不可欠な知識と思います。どうぞ私たちが新作聖書に語られたメッセージを正確に理解したうえで現代のわれわれに語り掛けているメッセージを受け止めることができますように助けてください。そして主イエスの福音のメッセージの証人として私たちを立ててください。われらの救い主、イエス・キリストの御名により祈ります。）